

本科 2 期 10 月度

解答

Z会東大進学教室

早大国語



## 【問題】(演習)

出典：清少納言『枕草子』(一一九段 あはれなるもの) / 同志社大学 文学部 92年・改題

## 現代語訳

しみじみと感動的なもの。親孝行な心がある、世人の子(「孝行心に厚い子供」。身分の高い男性で若い(人)が、御獄(「金峰山」参詣の前に行く精進潔斎をしている(姿も感動的だ)。(仕切りなどを)置き(家人と間を)隔てて(その向こう側に)坐って、勤行をしている夜明け前の礼拝は、たいそう感動的だ。親しい間柄の人などが、目を覚まして(仕切りの向こうで、こちらの唱える経文を今)聞いているだろう(と、その様子を)、想像する(のも心打たれることだ)。(御獄へ)参詣する途中の状態は、どんなであろうかなどと(身を)慎んで恐れていたところ、つつがなく参着したのは、たいへんすばらしいものである。(御獄精進の際にかぶる浄衣姿の)烏帽子の格好などは、少々みっともない(のが難だ)。それでもやはり、高貴な人と申し上げても、(服装なども)このうえなく質素にして参詣するものだと言っている。(だから、烏帽子の格好が体裁の悪いものでも、気にすることもないだろう)。

(御獄精進といえは、こんな話があった。質素な姿での参詣が常識なのに)右衛門佐宣孝(「藤原宣孝・紫式部の夫」と言っていた方は、「そんな慣習は)つまらないことだ。単に清浄な衣服を着て参詣するなら、何の支障があるのか(、まったく構わないはずだ)。よもや必ず(身なりを)みすばらしく(して)参詣せよと、御獄(の権現さま)は決しておっしゃるまい」と(言つ)て、(陰曆)三月下旬に、紫のたいへん濃い指貫(の袴)、白い狩衣、山吹(の襲色目)のたいへんに派手派手しい(衣)などを着て、(自分の長男の)隆光という(そのとき)主殿助である(子)には、青色の狩衣、紅色の着物、(模様を)乱れ染めに摺り出した(派手な)水干という袴を着せて、(親子揃って異様に目立つ姿で)続いて参詣していた(様子)を、(御獄から)帰る人もこれから参詣する(人)も、珍らしく、奇妙なことと(思い)、まったく、昔からこの山に、こんな(に派手な)姿の人は見られなかったと、あきれかえったのだが、四月一日に(京へ)帰って、六月十日のころに、筑前の国守が辞職したところに、(後任として)任官していたのは、なるほど(宣孝の)

言った（御嶽参詣に際しては姿はどうであつても御利益ゴリキは変わらないものだという）ことのとおりなのだなあ、と評判になった。これは感動的なことではないが、御嶽（の話）のついで（に紹介したの）である。

（話は戻るが、）男でも女でも、若くて容貌の美しい（人）が、真っ黒い着物を着ているのはしみじみと哀感を催す。（陰曆）九月の末や十月はじめの（晩秋から初冬にかけての）ころに、ただもう生きているのか死んでいるのか（というほんの微かな程度）に耳にしたコオロギの声（も胸をしめつける）。鶏が、卵を抱いてうずくまっている姿（も胸を打つ）。秋の深まった庭の丈の低い雑草に、露が、さまざまな宝玉のようにして（きらきら光を放ちながら）宿っている（光景にも感動を覚える）。夕暮れや夜明け前に、真竹が風に吹かれている（その音を）、目を覚まして聞いている（ときも、しみじみとした気持ちになる）。また、夜など（の風物や情景）もおしなべて（しみじみとした気持ちにするものだ）。山里の雪（もそうだ）。愛し合っている若い人の仲が、（その仲を）邪魔する者がいて、思うようにならない（ようなのも、また情緒があるものだ）。

解答

問1 A ㉑(1) B ㉒(4) 問2 (3) 問3 (3)

問4 ただ単に清浄な衣服を着て詣でるなら、どういう問題があるのか、いやあるはずがない。〔解答例〕

／単に清浄な着物を着て詣でようというのに、支障などないはずだ。〔別解例〕

問5 (2) 問6 (4)

問7 宣孝の型破りな行動が、御嶽に関連する興味深い挿話であるから。〔30字・解答例〕

／御嶽精進に関する逸話で、宣孝の異色な出来事を思い出したから。〔30字・別解例〕

出典：『藤簾冊子』「こを梅」／ 昭和女子大学 文・生活科学部 98年

## 現代語訳

鶯(が自分)の居場所(として)、春(の間中)ずっと独り占めしていた(梅の木な)のだが、だんだんと荒れてゆくような有様で、(花は)梢でしほみ、どの木でも散りこぼれるのに、香りだけは馥郁ふいくとしているのは、(冬の間)雪や氷にも寒い嵐(の苦しき)をも堪え忍ぶことが、他の木よりも勝っているからなのだなあ。

(陰曆)二月の初めになると、(散った梅の花びらが池に浮いているのは、まるで梅の木が)鏡のような水面に映るのを曇らせては(花盛りを過ぎた自分自身の)老いを隠そうとする(ように思われる)のだよ。風が何となく暖かく、野山の霞が趣深く一面にかかっている(、たいへんのどかな季節となった)のに、自分の(盛りの)時節ではないと(思っ)てすっかり散ってしまう(梅の)気持ちは何とも殺風景な(ほどに潔すぎる)ことよ。

(咲き方自体は白梅と)同じ風情ではあるが、紅に美しく照り映える(梅)は(その色が)薄いのも濃いのも、香りは(白梅に)少し劣っているものの、(正月でなく少し春らしさが募ってから盛りを迎えるのだから)「いかにも春を心得ているといったげな表情」とはこ(の紅梅)の盛りのことを言うのがよい。(私が)暮らす庵の軒端近くに五本六本と(梅の木が)枝を重ね、色や香りを競いながら咲き誇っているが、春の日影がまばゆく照り交わりたいそう華麗なので、鶯が梢を懐かしがって、(今年も)また、こ(の梅の木々)にやって来て巣作りなどするのは、卵をなんとかして産もうとしているのであると、人が目をお留めになっているほどに、(鶯のほうの)「いかにもここに住み慣れているという表情」も憎らしくは思われない。花の形は、(色が)濃いのも薄いのも少々野暮ったい感じで幾重にも厚くほつてりとしているのを、高貴で教養のある方が御覧になると、若い女房(たち)が、顔も隠さずに(人目も気にせず)声をあげて笑い、素焼きの杯を盛んに取りかわして(すっかり酒に酔っては)、今様歌を一曲二曲、扇を広げて人の口まねをして歌い出しているような様子にお思になるのだろう。だから、あまりに色濃く染まりすぎているのは、(その色濃い花をたくさん付けた)枝(の様子)も仰々しく、(わざとらしくて)不愉快に見えてしまうものだ。(色濃い八重の紅梅を)春が来るたびに目に親しみ心惹かれては、この花が咲かなかったならば(春はさぞつまらなかっただろうな)と思うようになってしまうのは、何といってもやはり

上品なことを見分けることのない気持ちから（そのように）思うのであるに違いない。だんだんと散り始めてくるころになると、（色の）薄いのは言うまでもなく濃いのもみっともなく色褪せてゆくのを見ると、（春の初めの白梅を）雪と見間違った（風情）には、（紅梅は）なるほど劣って見えるのももっともなことだ。

（紅梅がさね襲の）着物の色目や紙の重ねなどをちよつと見ると、（他の色より）いかにも勝っているように（見えるものだ）。それはしかし一方では、たいそう上品であるような人が、針目も整って縫い上げてお召しあそばそうと（する着物や）、墨もちよつとしか付け足さずに（ところどころ）かされるように書いておいでになる（紙の筆蹟などの派手ではないもの）を、（雑に縫った着物やぼつてりと墨を含ませた紙よりも）まことに素晴らしいと拝見するものだ。髪先のほうが細くなり、額（の生え際）が少し後退したようなお方のためには、（せつかくの紅梅襲の着物も）どうにも甲斐がないとお思いになるのではなからうかどうだろう。まして俗世を捨てて（髪を）わざわざ短く切り捨てているような私みたいな者が、今となつてはもう手でさえも触れることはできない（着物や紙の）色あざやかな美しさを、自分にとって実感もない言い方で誉めてもいったい何にならうか（、無意味なだけだ）。

夏が来て、梅雨のころに、（こちらに）三つ（あちらに）七つと落ちこぼれている（梅の）実を拾つては、（その実は）斎日の精進の（ために優雅さが）もつてこいのものと珍重して、有り難く頂戴するのにふさわしいものだ。しかし（身分の）高い人も低い人も、年寄りも若者も、まず気にして眺めるのはこの（紅梅の）花の色合いで（ある）。そうはいつてもやはり、解きほどこいて洗い仕立て直した（紅梅色の）着物が黒ずんだり黄ばんだりしているのを見ると、他の色よりも（一段と）見苦しく思うものだから、（紅梅色は）浮ついた調子に乗っていて花の盛りのほんのひとときの（華やかさに過ぎない）色だと判定せずにはいられないものだった。

山風がさつと雨を催しては、一晩のうちに（梅の花が）すっかり散り終わっているのを見ると、形あるものほとりもなおさず実体がなく、抛り所のないものであるという（『般若心経』の「色即是空」の教えの）ことが、このことにつけても思い知らされずにはいられないのであった。

解答

問1 エ 問2 花が水面に散って盛りを過ぎた梅の姿が映らない状態。(25字・解答例)

問3 ウ 問4 ア 問5 オ 問6 ウ 問7 イ

問8 白梅 問9 なるほど見劣りしてしまうのはもったもなことだ。(23字・解答例)

問10 イ 問11 ウ 問12 オ 問13 イ 問14 オ

問15 はやりかゝめらるる(20行目) 問16 イ

解説

問1 かなで「こと」と書かれる字のうち、古文の解釈によく関わってくるものとしては、まず「言・異・殊」の三文字を思い浮かべるとよい。他に「琴・毎・事」などもあるが、これらの頻度は低い。

本問では、選択肢アおよびエが「異」の字をあてた解釈となり、その他の選択肢では「こと」の漢字表記では説明できない。さらに、アの「異国の木に比べ」は、もともと梅が中国から渡来したものであり、かつ問題文の書かれたのが鎖国時代であることから考えても、妥当とは言えないだろう。

問2 同じ段落の「おのが時ならずとて散りはつる心のいとすさまじな」と同様に、梅を人に見立てた《活喩(＝擬人法)》の技巧による表現である。とすればここで言う「老い」とは、前段の「木末にしほみ木ごとに散りこぼるる」様を譬えたものと判断できる。譬喩をはずして現実的・具体的な状態を述べればよい。「水の鏡をくもらせ」るのは前段の表現から「梅の花びらが水面に散りこぼれている」こと、「老い」とは「梅の木が盛りを過ぎていく」こと、「かくさふとする」は「梅の木の姿が水面に映っていない」ことを言うものと考えて、これらをまとめて字数に収める。

なお、「かくさふ」は「隠さむ」または「隠さう」の仮名遣いの誤りである。上代の《反復・継続》の助動詞に「ふ」があるが、これをそう解釈する必要はないだろう。江戸時代の中期ごろには口語文法は現代語とほぼ同様になっており、発音についてはさらに遡って現代語と同じような音韻体系が成立していたと考えられている。このため、江戸時代に書かれた擬古文には往々にして仮名遣いの乱れが見られる。ちなみに、出題時の出典には明示されていないが、この章段の題名には「こを梅」とある。内容からして明らかに「紅梅」のことで、本来なら「こう梅」とあるべきだが、これも当時すでに実際の発音が現代語と同様に「コーバイ」となっていたことを窺わせる表記の乱れである。大学入試では近世からの出題も年々増えている。過去問を解くときに、文学史の知識から問題文の成立年代に気をつける習慣をつけておこう。

**問3** 漢字では「種はひ」と書かれ、源氏物語にも見られる古い語だが、さほど使用頻度の高い語ではない。暗記しなければならないと考えるより、文脈から意味を判断する力を養う方が現実的だろう。（ただし、「くさ」に「種」と書いて「ものの根元」あるいは「種類」といった意味合いがあることは憶えておくべきだ。）

ここでは続く「紅に匂ふ」に注目する。「匂ふ」は本来は「視覚に訴える華やかさ」に関する語であり、ここでも梅の花についての表現であることから選択肢を絞り込むことができるだろう。梅には大別して白梅と紅梅とがあるのだから、ここで紅梅に言及している以上、白梅との比較が念頭にあるはずだ。（ほかに薄紅梅や、また厳密に言えばバラ科の梅とは違う臘梅などと言うものもあるが、常識的には紅白で十分。）アの「器量」ではこのあと《活喩》が消えているのにそぐわないし、イの「模様」が梅の花びらにはないのも常識の範疇だ。エ「素材」やオ「処置」では梅を観賞することには関係ない。

**問4** 他に例がないわけではないが、ほぼ作者の造語のようなものである。こんなときは、《造語法》に目を付けるに限る。「知り」は用言としては連用形だが、活用語連用形は《転成名詞》として体言扱いされる場合がある（「ひかる」↓「ひかり」、「はなす」↓「はなし」、「とおい」↓「とおく」など）。また、「春・知り・顔」の《体言（続く語の目的格）・転成名詞・「顔」》という構造に等しいものとして、現代語にも「訳知り顔」などというのがある。ここに気が付けば、アの「いかにも」に注目するのはたやすいことだ。

問5 直前に「八重に」とあり、花に関して「八重」といえばオシかない。八重梅について言う「あつ」は「厚」いことに違いなく、とすれば、分厚く重なる花びらの固まりを「肥え」ていると見なすのは自然なことだろう。

問6 空欄の前の譬えに「若き女房」とあるが、このような人が「面あらはに笑み誇り」などしているところを「よき人」すなわち「身分教養を兼ね備えた貴族」が見れば、蓮っ葉で嗜みのない印象を受けて不快に感じるだろう、と考えるのは古典常識による。また空欄の後には「あまりに」・「こちたく」・「うたて」などこれも不快感を示す語が並ぶ。したがって、空欄は順接を示す語で埋めるのが妥当と判断する。

問7 重要古語の基本的な意味を問うだけの問題。「こちたく」は形容詞「こちたし」の（本活用）連用形である。「こちたし」は「言甚し」のつづまった語で、「口数が多い」ことから「表現される物事が多い」ことにつながり、「大げさで煩わしい」気持ちを表すようになったと考えられている。関連語「ことごとし」・「ものものし」・「おどろおどろし」などとあわせて辞書で確認しておくことを勧める。

問8 少し前に「散りがたになれば」とあるので、これもやはり花のことを譬えたものとわかる。問題文では一貫して「梅」についてさまざまな感想を述べているわけだが、問3の解説にも触れたように「梅」には紅白がある。散るのが「雪」に譬えられるほうを「漢字二字で答え」るには「白梅」とするしかない。

問9 傍線部を品詞分解すると、「むべ（副詞）＋も（係助詞）＋おとり（動詞）＋て（接続助詞）＋見ゆる（動詞）＋を（格助詞）＋や（終助詞）」となる。「むべ」は漢字では「宜」と表記し、「納得」する気持ちをしめす。形容詞「むべし」・形容動詞「むべなり」・助動詞「べし」なども派生関係にある語である。「も」はここでは単なる《強意》の用法だと考えてよい。「おとりて見ゆる」はまとめて「見劣りする」で十分だ。最後の「をや」は漢文の《抑揚》の構文の訓読「（～すら～、いはんや～）をや」などに用いられる表現で、この構文の訳し方に出てくる「～はなおさらだ」という気持ちだが、ここでは「むべ」の気持ちを補って「～はもつともだ」のニュアンスを強調していると考えればよい。



そもそも、この文章で作者は紅梅と白梅とを比較し、紅梅については、5～8行目では「春の盛りを代表する花」として好意的に表現しているのだが、全体を見渡すと、「こちたく、うたて」（10～11行目）として白梅と比べると否定的に評価し、また15～17行目でも紅梅色という色を「老人や出家者には似つかわしくないもの」と言い、19～20行目ではさらに「衣服の紅梅色が汚れると、他の色よりもかえって汚らしい」として、むしろ否定的な見方を示している。「紅梅色」は伝統的には華やかな色の代表であり、平安時代以来、老若男女を問わず好まれた色であることは、ひとまず古典常識としてわきまえておきたい。しかし、14～15行目に「それはた世にあてやかならむ人の、針目をかしょうひねり縫ひて召させ給はむと、墨次ぎはかなう書き消ち給ふらむこそ、いとめでたしとは見奉れ」とあるように、端正であつさりとした風情にひかれがちな作者にとっては、白梅の風情のほうが好ましかったことが読みとれる。

なお、「はた」は「また」に通じる。現代語での「また」は共通点に注目した《並列》の用法が多いが、本来は《対比》がメインの用法である。これも辞書で確認して、「また」ではじまる派生語も整理しておくといよい。

**問10** 選択肢は問6とまったく共通である。空欄の前では「髪の末細り、額少しあがりたる人」すなわち「老人」を挙げ、空欄の後では「世を捨て、（髪を）ふかうそぎなしたらむおのがたぐひ」と「出家者」を挙げる。いずれも華やかな色の代表である「紅梅色」が似つかわしくない例として挙げられたものと考えられることになるが、その程度は、出家者においてひとしおだろう。したがって、前を抑えて後を強調する《抑揚》の接続語で空欄を埋めることになる。

**問11** 「そぐ」に「削ぐ」の字を当てることを思い出せるかどうかが決め手だろう。「深く削ぐ」とは「髪を短く切り揃える」ことである。また、これに添えて複合動詞を構成する「くなす」は「意識的にくする」のニュアンスを添える。とすると、他者の意思に依存するアや自然・自発的な状態を示すオでは不適切である。イ・エは文脈によっては「出家者の態度」として共通するが、これらを選ぶのでは《意識》となってしまう。一般に大学入試では《意識》すべきところはむしろ《内容説明》型の設問の対象となることから考えれば、設問で「解釈」（これは実質的に「具体的な説明を加味した現代語訳」に等しい）と言っている以上、傍線部の表現に最も近いウで十分である。

問12 「夏」の「雨」の異名を問う問題である。知らないものがあっても、オの「五月雨」の別名が「梅雨」であることは、古典常識というより現代でも生きている語と言うべきだろう。

なお、アに含まれる「時雨」は晩秋から冬にかけての断続的な雨を言う。イは「虎が涙」とも言っていて、陰暦五月二十八日に降る雨を大磯の遊女・虎御前と曾我の十郎との悲恋に因んで名付けたものだから、確かに「夏の雨」なのだが、一日だけに限定されている点でオに劣る。ウの「七夕雨」は、七月七日が陰暦では秋になることに注意。エの「小糠雨」は季節を問わず霧雨のように細かく降る雨を言う。イは論外としても、あとの四つはどれも常識と言えよう。

問13 「いみじ」は一般に原義から離れて単なる強調に使われやすい語だから、「いみじもの」も「たいしたもの」程度に考えて、文脈から意味を推定するしかない。ここでは直後に「賜ぶ」とあるが、これは「こぼれたる実を拾ひて」のことだから、謙譲語と判断して「(ありがたく)頂戴する」の意で解釈する。これでイ・ウに絞り込める。さらに、傍線部直前の「節忌」に施された注釈に「精進」とあるから、「祝儀」ではそぐわないと考えてイを採る。

問14 問10と同様、選択肢は問6とまったく共通である。空欄の前では問13にも見たとおり「梅の実」について述べているが、空欄の後では「花の色あひ」を問題にしていることから、話題の食い違いに注目して逆接の接続語を採る。

問15 傍線部の直前の「色は即ち空しく、仮初ものなること」が、傍線部の「これ」を思い知らせるよすがであると書かれている。この表現は明らかに「色即是空」に由来するもので、本来の仏道の意味合いからすれば、「色」は「しき」と読んで「いっさいの物質および現象」を意味する。問題文の文脈からすれば、単に「色」の話をしていたところから、文末のまとめとして出家者に相應しく(少々強引な感もあるが)仏道概念で締め括ろうとしたことだろう。したがって、そのきっかけとしては、「褪色のしやすさ」について述べた部分を抜き出せばよいことになる。この文章では、冒頭の四行で「香」を重視している他はほぼ一貫して「色」に触れているが、「これ」が《近称指示語》であることからまずは直前の段落に注目する。すると「空しく、仮初」に対応して前行の「はやかに」という表現が目につく。現代語では用いられることのまずない語だが、「流行る」と派生関係にあるだろうと考えるのである。あとはこれが《連用形》であることから用言を含んで抜き出せばよいのだが、さらに、「これ」という《代

名詞》と交換できるように《体言・準体言》の形で抜き出すことに注意する。

なお、作者・上田秋成が読本作家としてのみならず（本居宣長などとはほぼ同時代の）国学者としても実績を残していることは憶えておきたいが、そんな人物でも仏道に関心を持ち造詣が深いのは、近世（あるいは近代）までの知識人の常であると考えられることだ。

**問16** イは作者・上田秋成の代表作である。あとの選択肢で文学史上重要な作品といえばア（新井白石）くらいのものか。これは入試

問題の問題文としても時折用いられるものである。

## 【問題】(演習)

出典：『源氏物語』「若菜上」の一節 / 法政大学 00年

## 現代語訳

A 大将(「光源氏の息子である夕霧」)も督の君(「夕霧のいところである柏木」)も皆、(庭に)お下りになって、えもいわれぬみごとな桜の花の陰を行き来していらつしやる(お姿に)夕日が映えて、たいそう美しい。(蹴鞠というものは)あまり体裁のよいものでもなく、騒々しく落ちつきのない遊びであるようだが、場所がら、人柄(によつて趣も生じてくるもの)なのであった。趣深い庭の木立で、たいそう濃く霞が立ちこめている(ところ)に、様々に蕾がほころんでいる花の木々や、わずかに若芽のふいている(木の)陰に、こうした何ということもない遊び事ではあるけれども、上手下手の違いがあるのを競いながら、「自分も(他の人に)負けてはいないぞ」と思っている面持ちの中で、(柏木)衛門督がほんのお付き合い程度に参加なさっていらつしやった(が、その)足さばき(の見事さ)に、並ぶ人はいなかったのだ。容貌がたいそう美しく、みずみずしく優美な姿をしているこの人(「柏木」)が、ひどく気を遣い、それでもやはり(蹴鞠に夢中になるあまり)羽目はずししている様子なのは、おもしろい見物である。御階の間(「寢殿の南面、中央の階段のある一間」)に面している桜の陰に集まって、人々が、花のことも忘れて(蹴鞠に)熱中しているのを、大殿(「光源氏」)も宮(「蜩兵部卿宮。光源氏の異母弟にあたる」)も、隅の高欄(「寢殿東南の隅の簀子付近の高欄」)に出て御覧になる。たいそう熟練している(人々の技量に)熱心さがうかがわれて、(蹴鞠の)回数が多くなっていく(「鞠が地に落ちて一度と数える」と、身分の高い人も乱れてきて、冠をつけた額のあたりが少しゆるんでいる。大将の君(「夕霧」)も、(自分の)高い位を思うと、「いつになくはめをはずしすぎてしまったなあ」と思わずにいられないけれども、見た目は誰よりも格別に若く美しく、\*桜の直衣の、少し(糊気のぬけて)柔らかくなったのを着て、指貫袴さしぬまの裾のあたりが少しふくらんでいるのを、ほんの少し引き上げていらつしやる。(しかし、大将の君は少しも)軽率には見え、何となくきれいなかつろいだ姿に、花が、雪のように降りかかっている、ちよっと見上

げて、たわんでいる枝を少し(手で)折り取って、階段の中ほどにお座りになった。

B 督の君(「柏木」)が、(夕霧に)引き続きいて(座り込んで)、「花がひどく乱れて散るようですね。(風も)桜だけは避けて(吹けばよいのに)」などとおっしゃりながら、宮の御前(「女三宮」)の方を横目で見ると、いつものように、特に慎み深くすることもない(女房たちの)気配があれこれ感じられて、色とりどりに(装束の)こぼれ出ている御簾の端々や、透けて見える人影などが、「(まるで)春の手向けの幣袋\*ぬいぶくろであろうか」と思われる。いくつもの御几帳が、しまりなく部屋\*むろの隅に寄せてあつて、人の気配がすぐ近くにあり(奥ゆかしさもなく)世馴れた感じでもあるが、唐猫\*からねこでたいそう小さくかわいらしいのを、少し大きな猫が追いかけて、突然、簾の端から走り出るので、女房たちが怯え騒いで、あれこれ身動きして立ち動く気配や着物の音が、耳にやかましい感じである。猫はまだよく人になつかないのであるうか、綱\*つながたいそう長く付いていたのを、何かにひっかけてからまったので、「逃げよう」として引つ張っているうちに、御簾の横の端が、(内部が)たいそうはつきり見えるほど引き開けられたのを、(気付いて)すぐに直そうとする人もいない。この柱のそばにいた女房たちも慌ててしまった様子で(皆手出しができず)怖がっている気配である。几帳のそばから少し入ったあたりに、桂姿\*つちきすがた(「貴族女性のふだん着」)でお立ちになっている人がいる。「中略」蹴鞠\*けまりに熱中する若い貴公子たちの、花が散るのを惜しんでなどいられない様子を見ようとして、女房たちは(こちら側が)丸見えであるのを、すぐには気付くことができないのであろう。猫がずいぶん鳴くので、(女三宮が)振り返っていらっしやる表情やふるまいなどが、たいそうおっとりして、(柏木には)「なんとまあ若くてかわいらしい人だなあ」と、すぐに感じられた。

#### 訳注

\*桜の直衣……表は白。裏は濃色(こまじろ)(「濃い紫」)または葡萄染(えびぞめ)の襲色目(かさね)。若人向きの衣服である。

\*指貫袴……裾の周りにひもを指し貫いておいて、着る時に裾をくくって足首のあたりで縛るようにした袴。

\*幣袋……春の女神である佐保姫への供え物。袖口や透影を幣袋に見立てたのである。

解答

問1	ア	3
問2	イ	4
問3	ウ	4
問4	エ	1
問5	オ	3
問6	カ	4
問7	キ	7
	ク	2
	ケ	6
	コ	5
	カ	1

出典：『住吉物語』「上」の一節 / 法政大学 経営学部 92年

## 現代語訳

筑前が、「ほんの）一行の御返事ででもいただきとうございます」と（言つ）て（対の君に）催促すると、（対の君は）「こうした（恋文の返事を書くというような）ことも、慣れていないので」と（言つ）て、取り合わないでいる様子を見て（筑前が少将のところに）帰っては、（対の君の様子を）詳しくお話し申し上げると、少将は、「（はじめは）そんなものだろうよ（、やっぱり御返事はもらえなかつたか）。（だが）ひたすらもつともつと（私の思いを姫君に）申し上げてくれ。どうしたことか（前世からの因縁には違いないが）、この（恋の）ことは、先行き（の成就）がなくては、世に命を長らえる気もしないからなあ」と（言つ）て、もの思いにふけりがちでいらつしやるのを見るにつけても（筑前は少将がお気の毒で）、その後、毎日（対の君の所へ）行つて、（少将の恋を受け入れるようにと）それとなくほめかすのだが、流れる水に数を書く（ように何の効き目もない）気持ちが出て、（筑前は次第に）言う言葉に困り、（少将と対の君のもとを）行つたり来たりしているうちに、（対の君の）継母は、この（対の君に思いを寄せている人がいるという）ことを小耳に挟んで、筑前を呼びつけて、「最近、対の君に手紙を送っているという（人）は、どのような人なのかしら」と尋ねると、（筑前は）少しの間は、あれやこれやと（知らぬ存ぜぬで）抵抗して（答えずに）おりましたが、しつこく問われたので（仕方なく）、ありのままに、「こうこうなのです」と申し上げると、継母は、その（説明）を聞いておっしゃるには、「そのような身分の高い家の御息は、（婿君として妻の家の）人に大切にされたいとお思いになるに決まっています。（対の君のような実の）母もいない人よりは、（私の産んだ）三の君が年とともに美しくおなりになるそうだから、（三の君のほうに）似つかわしい縁談だと思っただけだ。（ちようど好都合な）いいお話です。（少将さまが三の君のところへお通いになるように）お取り持ちくださいな。そうなつたら、そなた（＝筑前）のことを、この世だけでなく（来世まで）ありがたく」思うことでしょうか」と、心から熱心に言ったので、（そこまで言われると筑前も）何といつてもやはり拒みにくいために、「本当に、何度も（対の君さまに少将さまからのお手紙を）お伝えしておりますのに、（そのお手紙に）お返事もくださいませんので、少将さまが、この筑前めだけをお咎めあそばしますのも、（私には）どうしようもなくつらうございます。そうとはいっても、（先行きの見込みがあるというのならいいのですが）後々まで（少将さまに）対の君さまの色よいお返

事を) 申しあげることができるようなことは難しいと思われるのも心苦しいのです。(わかりました) そういうことなら、そのように(仰せのとおりにいたしましょう)」と仰うので、(継母は) 喜んで、(筑前に褒美として) 白い袷を着、「これは三の君(から)の(志)として取っておきなさい)」と(言っ)てお与えになったところ、(筑前は) 喜んで、「それでは、少将さまには、(三の君のことを少将さまが) 初めから心をかけている姫君だと(いうことにして) 御紹介申しあげましょう」と、(とうとう) 申しあげてしまったので、(継母は) 「よくぞ言ってくれました。そのようにこそ(うまく取り計らっておくれ)」と(言っ)て、お喜びになった。

その後、筑前は少将さまのお屋敷に参上して、「姫さまからお返事を頂戴したと) 申しあげることができるのは難しゅうございますが、もう一度(少将さまの) お手紙を頂いて、(姫さまに私から) 申しあげてみましょう」と仰うと、(少将は) たいそう嬉しくて、このように歌を詠んだ。

世とともに……常に煙が絶えることのない富士の山の地中に、(その煙の立ちのぼるもとなる) 燃える炎(があるはずですが、それ)と同じように私の身も人知れず(あなたに) 思いこがれる心が尽きません

と書いて、(それを) 筑前が受け取って、「少将さま(からの) お手紙(です)」と(言っ)て、継母にお届けすると、(継母は) 喜んで、「なんとも見事に書いておいでになるんですね。この(お手紙への) お返事をお書きなさい」と、(その手紙を三の君に渡して) おっしゃったので、三の君は、(母が自分を) 騙しているとも知らず、恥じらっている姿は、たいそう感じがよく、いじらしい姿である。

#### 訳註

問題文7～8行目「ねびまさり給ふなる」の助動詞「なる」は、「給ふ」を《連体形》と見れば《断定》の用法となるが、一般に、肯定的な言い切りにも用いることのできる動詞のあとに続けて、文中で《断定》の用法が用いられることは稀である。ここでは「給ふ」を《終止形》と見て、「なる」を《伝聞》の用法で解釈してある。同じ屋敷内に暮らす実の娘の成長の様子を人から聞いたこととして表現するのは不自然にも思われるだろうが、ここは「上流階級の常として娘の養育は乳母に委ねてあることから、表現上は遠慮したものの」と考える。

問題文12行目「申しつけければ」は、古典文法では破格の表現である。《現代語訳》は「申しつけてければ」とあったものとして訳してある。



解答

問1 主語Ⅱイ 内容Ⅱイ 問2 オ 問3 ア

問4 アⅡY イⅡN ウⅡN エⅡY オⅡN カⅡN キⅡY

解説

問1 主語については、古典常識の理解があれば基本的な問題である。傍線部の最後の「ありく」という動詞に注目すると、これは「目的地を一箇所と定めずにあちらこちらと移動する」意味を示し、「目的地に向かって足で移動する」ことを「あるく」というのと区別される。ここでは、傍線部直前の「日毎に行きて」を考え合わせれば、「少将」邸と「対の君」のもとを往復していることをいうとわかる。ただしここで注意すべきは、「少将」その人が主語とはならないということである。当時の「通い婚」の形態を考えると、つい「少将が通っていた」と考えてしまいがちだが、問題文に先立つ説明から「少将は対の君から手紙の返事をもらおうとしている」ことがわかり、また問題文の後半からもわかるとおり、「少将」は傍線部の時点でもまだ「対の君」にあったことはない。したがって、ここで「少将」邸と「対の君」のもとを往復するのは、「少将」の手紙を託された「筑前」だということになる。

右を踏まえて、傍線部の内容を考える。「行く水に数かく心ち」は「流れる水に数を書くような気持ち」の意。これは「やってもやっても手応え・甲斐がないこと」を言うと考えられる。傍線部の直前の「日毎に行きて、ほのめかせ共」は、右に見たとおり「筑前」が『少将』の気持ちをはのめかしても」ということになるから、対象は「対の君」である。したがって選択肢アは「少将」が間違っている。選択肢ウは譬喩である「行く水……」を現実の行為としている点で不適。エは「病気になる」が間違い。「煩ふ」単独ならたしかに「病気になる」意を示すこともあるが、原義は「難儀する」の意である（形容詞「煩はし」と一緒に確認することを勧める）。「言ひわづらふ」となると「言うのに難儀する」↓「言葉に困る」といった意味合いになる。オは「少将に恋わずらいしている」が間違い。「下仕え」だって人間だ、貴族（「少将」が「殿上人」の一員であるのは古典常識の範疇に属する）に恋をしたっていいじゃないか、と思うのは現代人の発想で、身分制が厳として存在した古代社会においては少々考えにくいことであり、だいたいそれでは傍線部直前の「日毎に行きて、ほのめかせ共」から「行く水に数かく心ちして」に繋がる文脈に乗らない。よっ

て正解はイとなる。

問2 選択肢型現代語訳問題の基本的手順として、まず文法的に問題のある選択肢を排除する。本問では、傍線部末の尊敬語本動詞

「給ふ」を謙讓語で訳してしまっているイは、他の部分を読むまでもなく間違いだとわかる。次に、今見た「給ふ」が「御返しも給はぬ」となっていることから、これとの組合せで前半の「聞こゆ」は「(言葉を)申しあげる」の意味の謙讓語で、かつ「聞こゆ」↓「御返し」の流れから「手紙を出す(届ける)」↓「返事」の意味で使っているものと判断する。あとは、問題文に先立つ説明を考え合わせて、「少将がどんなに手紙を出しても対の君は返事をしない」という内容の選択肢を選ぶ。よって正解はオである。

なお、ア・ウについては、後半の主語を「少将」としている点で不適である。傍線部に続いて接続助詞「ば」が見られるが、接続助詞とは《節》を繋ぐ助詞であり、《節》とはそれだけでも《文》となりうる要素を備えた(連)文節のことである。これを踏まえると、(現代文でもそうだろうが)古文では「わかりきったことはなるべく言わない」ということの裏返しとして、「接続助詞に続いて次の節の主語(たとえばここでは「少将」)が示される場合、接続助詞で終わる節の主語は次の節に示された主語(たとえばここでは「少将」とは異なる」という原則がある。したがって、選択肢後半の主語は「少将」であってはならない。

また、エに見られる「桂」については、(無理に覚える必要はないが)次のことをわきまえておくと古文の読解が楽になる場面がままあるものである。すなわち、問題文中では11行目に「白き桂一かさね、『是は三の君の』とて、出だし給ひ」とあるのに注目する。「桂」とは「はおおって着る着物」の意味であり、古代の装束では男女ともに「上着と肌着の間に着るもの」として着用されたものだが、一方これは上位者から下位者に対して与えられることも多く、この場合は「褒美・引き出物」の意味が込められるものであった。貴族の家では何かとささの褒美のために「桂」を常備していたものであり、とくに「白き桂」はこのような「褒美・引き出物」のために用いられることが多かったものである。

問3 目立った文法事項はないので、手がかりになりそうな語彙の面から考えていく。

まず、形容詞「心ぐる(苦)し」は、本来「相手の様子を見て、こちらもつらい」という心情を表す語である。自分についても言うことがあるが、「苦し」を含むことからわかるように「難儀だ・苦労に思う」といった意味合いで用いるのが常であり、ウの「不愉快だ」やオの「堅苦しい」は遠すぎる。

次に、前半の「かたげに」を見る。これは形容動詞「かたげなり」の連用形で、「くげなり」型の形容動詞は一般に、「く」の部  
分（少々変形することは多いが単独で使える表現）に客観性Ⅱ「はたからくのように見える」といったニュアンスを添えて成立す  
る語である。ここでの「く」は「かた」で、これは形容詞「難し」や「堅し・固し・硬し」の語幹と見ることが出来る。アは「難  
げなり」と見る解釈である。これは傍線部直前にある主語「後まで申しえん事」からの文脈に照らしでも全く無理がない。エは「堅  
げなり」と見る解釈だが、主語「後まで申しえん事」と繋がらない。イは「かた」を名詞「片」として「不完全・不具」の意にと  
ろうとしたものか。しかしそれにしても、それを言いたければ古語では「片端なり」の語を用いるはずだ。（これは言うまでもなく、  
現代語では「差別用語」となっている「かたわ」の語源である。）したがって正解はアとなる。

この設問については、いきなり傍線部直前との流れで考えてもアが選べた諸君も多かったことと思う。それはそれでいいのだが、  
設問部の前後の繋がりが確実に理解できていないと、思わぬ勘違いをひきおこすことも多い。右に見たような「確実なところ  
から攻める」やりかたもできるようにしておいたほうが、実際の試験においては強いはずだ。

#### 問4

動詞「たばかり」は①「工夫・計画する」・②「相談する」・③「取り繕う」・④「ごまかす・騙す」のように意味が広がる語で  
ある。問題文では、①の意味で用いられて、「ことをうまく運ぶ」とでも訳すところであろう。また後者では「三の君」  
を「たばかり」の対象としつつ、④の意味で「少将の意中の人が実は対の君であることを母は三の君に隠している」ことを言っ  
ていると考えてよい。

ア 「たばかり」を前者の部分で問題にしたものと考えれば、選択肢中に不適切な表現は見当たらない。

イ 「巨額の贈り物」が不適。「筑前」は「少将」の手紙の仲立ちをしていただけである。

ウ 「三の君との」が不適。「いつの間にか」の前は本来の少将の目当てを表現すべきだから、「対の君との」となければならぬ。  
その他にも、「歌のやりとり」は実現していないこと、「継母との歌の交換」はさすがの「継母」も意図してはいないことなど、  
問題が多い選択肢である。

エ 「たばかり」は前者・後者ともまったく問題ない。問題文7～8行目の「継母」の言葉「左様の公達は、人にいたはられん  
とこそおぼすべけれ。母もなき人よりは、三の君……さるべきさまと思ふに」の意味するところが、まさに選択肢である。

オ 「対の君」と「三の君」との関係がちょうどエと反対なのだから、エが正しければオは当然まちがいとなる。

カ「思っていた」が不適。この文章だけでは「三の君」の意中の人はわからない。また、エで見たように「継母」の画策の意  
図は「少将」と「三の君」との結婚にあるのだから、「他の男性と」もおかしい。

キ「たばかり」を後者の部分で問題にしたものと考えれば、選択肢中に不適切な表現は見当たらない。

●  
メ  
モ  
●